

日本仏教文化の特徴と変遷の軌跡

講師 牛 黎濤

世界史を縦覧すれば、発展途上であった国が先進国を追い抜いた歴史もあり、各国の社会発展の速度は均等ではないことがわかる。また、社会発展は、一国だけの取組みで社会を急速に発展させることは不可能であり、各国間、特に隣国間において政治・経済・文化の交流が行われ、相互に影響を与えながらなされていく。古代日本の社会発展は、中国や仏教と大きく関わっている。本発表では、これらの関係から日本仏教の特徴と変遷を考察した。

まず、簡単に日本の仏教伝来から定着までを振り返ってみよう。

仏教が朝鮮から日本に伝来した六世紀当初、仏は蕃神などと呼ばれ、国外から来た神と認識されていた。また、日本で最初に出家した人物が善信尼という女性であったことから、僧侶は巫女と同様に考えられていた可能性が高い。つまりこの当時、仏教に求められたものは、思想や教義ではなく、鎮護国家のための機能と治病などの現世利益であったと考えられる。

七世紀中葉、日本は遣唐使を派遣し、大陸から積極的に政治制度や文化を吸収した。この際、仏教經典の収集も目的の一つであったとされる。この交流によって、日本に部分的な仏教だけではなく、全体的な仏教思想や經典の多く

が伝えられた。この時代の仏教は、南都六宗に見られるように、学派的要素が強く、仏教の思想・教理の研究が重視されるものとなった。

平安時代になると、唐に留学し仏教を学んだ空海、最澄によって、密教と山岳信仰が融合する日本独自の仏教体系が構築されはじめた。この時期の仏教は、密教の加持祈祷を用いて鎮護国家などを願ったことから、皇室や貴族と結び付いていった。

平安時代末期から鎌倉時代には、源信、法然、親鸞が淨土思想を普及し、道元などが禪宗を広め、これらが武家の台頭にあわせ民衆に浸透し、仏教の日本における土着化が完成したと考えられる。

日本仏教は、上記のような段階を経て定着して来た。この過程のなかで、大陸との交流と仏教の影響は大きく、そこには各時代の政治的色彩も大きく反映されていた。

まず、日本の仏教公伝には、百済が高句麗と対立するにあたり、仏教を庇護した中国南朝の梁との同盟関係を円満にしようとする意図が関係している。次に、伝来後の崇仏・麁仏の対立は蘇我氏と物部氏の争いであり、これには蘇我氏が渡来系の氏族と深い関係にあったという経緯がある。奈良時代の天平文化は、まさに仏教文化と大陸文化が日本に浸透していった過程であり、平安末期から鎌倉時代の仏教は、国家や貴族のための仏教が民衆を救済するためのものになっていった過程であるといえる。

近代、明治維新の際に、日本仏教に対する抑圧として仏分離の特別令が出され、廃仏毀釈運動が展開し、多くの寺院が廃寺になり、仏塔などが破却された。それにもかかわらず、今猶、日本の歴代の高僧や仏教の甚深な經典は日本文化にいきづいており、多くの人々に親しまれている。日本において、仏教は長い時間をかけ国家の政治や社会生活と繋がり、文化として広く根付き、日本人のイデオロギーに影響を与えたのである。

参考文献：

王家驊、一九八六年、『儒家思想と日本文化』、浙江人民出版社、P.19

王守華ほか、一九八九年、『日本哲学史教程』、山東大学出版社

王勇、二〇〇一年、『日本文化』、高等教育出版社、P.155

家永三郎、一九九二年、『日本文化史』、岩波書店

牛黎濤、二〇一二年、『日本による仏教文化導入の分析』、『佛教文化学会紀要』、第20号

清原貞雄、一九九四年、『外来思想の日本的発達』、敝文館版

孫昌武、二〇一〇年、『中国佛教文化史』、中華書局

中村元著、一九九八年、『東洋人の思惟方法』、浙江人民出版社、P.286～289

張俊彦、一九八四年、『中日仏教交流一千年』、北京大學出

版社、P.2～3

田村圓澄、一九六九年、『飛鳥仏教史の研究』、端書房

木宮泰彦著、一九八〇年、『日中文化交流史』、商務印書館版、P.46～47

楊曾文、二〇〇八年、『日本佛教史』、人民出版社

魏常海、一九九六年、『日本文化概論』、世界知識出版社、P.62